

がって、頬粘膜癌では反対側へのリンパ節転移は起こし難いと考えられた。VX2 癌移植細胞巢内では癌の浸潤増殖に伴い腫瘍宿主境界部ではリンパ管の口径が細くなっていた。これに対し、癌組織周囲ではリンパ管は機能亢進のために蛇行し、互いに network を形成し、癌の浸潤増殖に対応しているものと考えられた。また、これらリンパ管の形態的变化は癌の増殖と関連し、リンパ節転移と密接に関連することが示唆された。

演題 3. 現代ケニア人の歯科疾患と食生活に関する野外調査

○亀谷 哲也, 田附 敏良

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

食生活の都市化に伴って歯科疾患の増加することが知られている。このことに関してケニア共和国の首都 Nairobi (諸部族混合), 国境の砂漠地帯 Lodwar (Trukana 族), その中間で農耕地の Kericho (Kipsigis 族) において調査を行った。対象は 0 歳児から老年までの各年代総計 1, 278 名である。調査は食生活に関する問診, 口腔診査, 頭部生体計測, 歯列の印象, 咀嚼筋電図記録, 写真撮影によって行った。また, 英国自然史博物館, ケンブリッジ大学, ハンガリー自然史博物館所蔵の近世ケニア人頭骨を調査した。

結果: (1) ケニア人が常食としていたウガリなどは若年層ほど少なく地域差もあり Nairobi で減少していた。一方, 都市型食生活の傾向は Trukana 族の摂取頻度は低かったが, 全体として西欧風の食生活に変化している傾向がみられた。

(2) ケニア人の咬合は, 正常咬合が多く, 不正咬合は叢生, 上顎前突が多かった。また, 歯と顎骨の不調和は, Lodwar で少なく Nairobi で多く, 特に混合歯咬合期を中心とする若年世代に多かった。

(3) 齶蝕, 歯周疾患などの状態から Lodwar 地区は他と比較して健全であったが, フッソ症の頻度は, Lodwar, Kericho, Nairobi でそれぞれ 38.7, 9.8, 5.9% で, Lodwar 地方の地質の影響が考えられた。

(4) 現代ケニア人には最近まで下顎前歯を抜歯する風習が残っており Lodwar で 24.5%, Kericho, 13.8%, Nairobi では 1.6% でみられた。ケニア古人骨に残る抜歯痕は 86.2% で, 抜歯の風習は時代とともに無くなっていることが認められた。一方, Lodwar 地区では幼児期に乳犬歯, 乳側切歯などの抜歯が行われ

ていた。以上から, 食生活の変化と歯科疾患の関連性が示唆され, 特に, 顎骨の退化を促す要因となることが示唆された。

本調査は, 平成 4 から 6 年度まで, 文部省科学研究費補助金国際学術研究 (課題番号 04041039, 代表者: 亀谷哲也) によって行われた。

演題 4. レセルピン処置マウスの唾液分泌能低下に対する α -D-N acetylneuraminyl cholesterol (α -SC) の回復作用

○村上 秀元, 伊藤 忠信

岩手医科大学歯学部薬理学講座

目的: α -D-N アセチルノイラミニルコレステロール (α -SC) はシアル酸化合物で, ガングリオシドに類似の構造を有する。 α -SC はガングリオシドと同様に *in vitro* で神経突起伸展作用を, *in vivo* では選択的に破壊された脳内コリン作動性神経変性の改善作用を有する。本実験ではレセルピン 1 回投与後, あるいはレセルピン反復投与後引き起こされるピロカルピン誘導唾液分泌反応抑制作用に対する α -SC の効果について検討した。

方法: 実験には ddy 系雄性マウスを用いた。唾液分泌量の測定はウレタン (0.5 g/kg, i.p.) で麻酔後, 固定装置を用いて不動化したマウスの顔面部を濾紙におき, しみ出る唾液痕の大きさで行った。

結果: 1) α -SC (1 mg/kg と 10 mg/kg, p.o.) はマウスの一般行動, 体重および唾液腺重量等には影響を及ぼさなかった。

2) α -SC 1 mg/kg は有意にピロカルピン (0.8 mg/kg, s.c.) 誘導唾液分泌反応を増大した。

3) α -SC 1 mg/kg は有意にレセルピン (1 mg/kg, s.c.) 投与 12 時間後に現れるピロカルピン誘導唾液分泌反応抑制に拮抗作用を示した。

4) α -SC 1 mg/kg はレセルピン (0.5 mg/kg, s.c.) 7 日間反復投与の 24 時間後に現れるピロカルピン誘導唾液分泌抑制に拮抗作用を示した。なお, α -SC 1 mg/kg で認められたような作用は α -SC 10 mg/kg で認められなかった。

結論: α -SC には中枢神経系で実験的に傷害されたコリン作動性神経に対して賦活的に作用するとの阿部らの報告があるが, 本実験結果は, 自律神経支配臓器である唾液腺においても, 機能を低下させた唾液腺に対して α -SC の適当量が賦活的に作用することを示

した。このことは、口腔内の異常の一つである口腔乾燥症にガングリオシド誘導体が有望な治療薬になりうるかもしれないことを示唆している。

演題 5. 鎖骨下動脈の枝の走行異常および分岐異常の一例

○櫻根誠一郎, 坂上 公一, 佐々木直光
佐々木琢哉, 佐々木利明*, 藤村 朗*
野坂洋一郎*

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座*
岩手医科大学歯学部 3 年

平成 6 年度歯学部解剖学実習に用いた遺体 25 体中 1 体の左側内胸動脈の走行異常と右側下甲状腺動脈の分布異常に遭遇したので報告する。破格を認めた遺体は、年齢 72 歳、男性、死因は心不全で、病歴その他に特記事項は認められなかった。本症例の左側内胸動脈は鎖骨下動脈の甲状頸動脈から分岐し、直ちに下降、鎖骨下静脈の前方を経過して胸郭上孔から胸腔に入り込んでいた。左側下甲状腺動脈は非常に細く、左側甲状頸動脈基部から起こり、甲状腺左葉下側方から侵入し、後面に分布していた。右側下甲状腺動脈は認められなかった。上甲状腺動脈は正常で、外頸動脈の第一枝として分岐し、甲状腺の上方から入り込んでいた。下方からは、腕頭動脈からの右側総頸動脈分岐部付近で起した枝が、直ちに甲状腺右葉下端から侵入し、甲状腺の前・後面に分布していた。さらに、ほとんど同じ太さの血管が分岐し、反対側に延び、甲状腺左葉に下方から侵入し、前・後面に分布していた。甲状腺に下方から侵入するこの血管の分岐位置から、最下甲状腺動脈であることが判明した。最下甲状腺動脈は出現率が約 10% で、その 90% 以上が腕頭動脈、または右側総頸動脈から分岐していることが報告されていることから、出現そのものは稀な症例ではないが、下甲状腺動脈が欠損、または発育の悪い場合の代償としての最下甲状腺動脈の出現には何らかの因果関係があるものと推測された。さらに、気管切開法の注意点として、最下甲状腺動脈の存在は成書には記載されておらず、実際の臨床の場において注意を要する血管であると考えられた。左側内胸動脈の鎖骨下静脈の前面を通る走行経路に関しては、過去に報告はなく、発生学的には動脈系と静脈系の形成時期のずれが考えられるが、文献的には比較が困難であった。鎖骨下動脈の分岐型は、上條の分類における V 型であった。今後は症例数

を集め、発生学的見地から本症例の走行経路を明らかにしていきたいと考えている。

演題 6. 鼻口蓋管嚢胞の一例

○村田 尚子, 松本 茂樹, 星 秀樹
杉山 芳樹, 関山 三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

今回我々は、若年者に出現した鼻口蓋管嚢胞の一例を経験したので、その概要を報告した。

症例は 17 歳の男性で、主訴は口蓋正中前方部粘膜の腫脹であった。現病歴は平成 6 年 2 月頃より同部に腫脹、圧痛を認め某歯科医院を受診した。消炎処置後、症状の改善はみられたが、エックス線所見により 2 + 2 相当部に透過像を認めたため、平成 6 年 3 月 30 日同院より紹介、当科を来院した。家族歴、既往歴に特記事項はなかった。全身所見は、体格中等度、栄養状態は良好で、顔色は良好で顔貌は左右対称であった。口腔内所見は口蓋正中前方部粘膜に軽度の腫脹を認めた。また、2 + 2 は電気歯髓診で、生活反応を示した。打診痛はなく、動揺は認めなかった。エックス線所見は 2 + 2 に境界明瞭なハート型の単胞性透過像が認められた。臨床診断は上顎嚢胞で、同年 4 月 11 日、局所麻酔下において嚢胞摘出術を施行した。病理組織所見は、嚢胞壁が内側の上皮層と外側の線維性結合組織層からなり、種々の程度のびまん性の炎症性細胞浸潤を伴っていた。上皮層のほとんどは 2 ~ 3 層の立方上皮細胞からなっていたが、多列線毛上皮細胞もみられ、線維性結合組織内には小動脈や、神経線維束も認められた。以上の臨床所見と病理組織所見より、鼻口蓋管嚢胞と診断した。現在術後 14 カ月であるが、再発等もなく経過良好であった。

以上、17 歳の鼻口蓋管嚢胞の症例について、若干の文献的考察を加えて報告した。